

黎明期のロシア映画産業とハンジョンコフ社の活動

大野 斉子

序

ロシアではじめて映画が公開されたのは 1896 年のことである。その後ロシアでは映画が徐々に普及し、各地で映画の上映が行われた。ロシアでまだ映画制作が始まっていなかったため、上映されるのは、フランスをはじめとするヨーロッパ、アメリカの制作した映画だった。

この最初期の映画を、外国の映画会社の動向と切り離して考えることはできない。1903 年ごろから急速に進む映画の産業化と市場の世界的な拡大という視点で見ると、ロシアは急成長したフランスの映画産業の市場の一つであり、世界的な映画の産業化の波に洗われた一つの地域にすぎなかった。

ロシアで映画制作が成功したのはそれからわずか数年後の 1908 年である。ロシアの映画会社が制作を始めてからも、ロシアの映画産業は技術やジャンルの各方面にわたり、外国の映画会社との関わりと競争の中にあった。ロシアの映画産業の基礎は、世界的な映画の産業化の中で確立された。

この論文では 1903 年から 1910 年頃を区切りとして、ロシア映画産業の基礎が築かれるプロセスを初期の映画界を支えたハンジョンコフ社の活動を中心に論じる。

ハンジョンコフ¹の回想録は、外国映画の配給や映画制作にまつわるエピソードの宝庫である。その中には、ロシアで映画が誕生する以前にハンジョンコフ社が行った映画制作での失敗のエピソードも多い。通常、日の目を見ない失敗作について語られることは少ないが、しかし、ロシア映画の胎動はそこの中にあった。

ハンジョンコフ社の活動は、この時代のロシア映画産業の成長の軌跡そのものであると言っても過言ではない。以下ではハンジョンコフの回想録を中心として、ハンジョンコフが映画産業に携わる時期から、ロシアの映画産業が確立し、映画制作が手探りで行われる数年間を追う。

I ではパテ社によって進められた映画の産業化とそれがロシアに及ぼした影響につい

¹ アレクサンドル・アレクセイヴィチ・ハンジョンコフ Александр Алексеевич Ханжонков (1877–1945)。ロシアで映画制作会社を設立し、1907 年から映画の制作を行った。1911 年から 1912 年にかけて、映画撮影技術の研究部門を設立し 1912 年にモスクワに映画スタジオを建設した。Кино: энциклопедический словарь / Гл. ред. С. И. Юткевич. М., 1986. С. 463. 参照。

て、1903年から1908年までを対象に考察する。Ⅱでは、ハンジョンコフ社の活動を追いながら、1903年から1908年までのロシアの映画を巡る状況の変遷を論じる。Ⅲでは、初めてのロシア映画が公開される1908年から1910年までのロシアの映画産業の発展を論じる。Ⅳでは、具体的なエピソードを中心に、ハンジョンコフ社の映画制作における成長の軌跡を追う。

I. パテによる映画の産業化 1903年から1908年まで

A. 映画の産業化とパテ社のロシア進出

1896年以来、ロシアでは映画の上映や外国人カメラマンによる撮影が行われてきた。しかしその頃上映されるフィルムの種類や興業回数はそれほど多くなく、配給の仕組みも確立していなかった。そこへ変化をもたらす一石を投じたのが、パテ社のロシア進出である。

映画の産業化とパテ社

世界の映画史の中で1903年から1909年までの数年間は、職人仕事であった映画制作が、世界を市場とする一大産業に発展した時代として位置づけられる。ジョルジュ・サドゥールはこの時期に映画の産業化を牽引したパテ兄弟社(以下ではパテ社と略記)の名を取り、1903年から1909年までを「パテの時代」と呼んだ。²

パテ兄弟(エミール・パテとシャルル・パテ)は機械装置の製造・仲買会社を経営したのち、1901年に映画制作業者となる。彼らの会社は、トラストによる事業拡大をへて、わずか6年間の間にシンガポールから合衆国まで数十箇所の都市に海外代理店を構えた。外国支店の開設と出資も行い、スタジオ、焼き付け工場、機材製造工場を擁するまでに成長した。³

パテ社のロシア進出

この時期のロシアにおいて、映画とパテ社を切り離すことはできない。パテ社は1902年から外国に代理店を開設する準備を始め、1904年以降、ドイツとイギリスを皮切りに次々と各国の主要都市に代理店を開いた。1904年にはアメリカ、ロンドン、ベルリン、

² ジョルジュ・サドゥール(丸尾定・出口丈人・小松弘訳)『世界映画全史4 パテの時代1903-1909』国書刊行会、1995年を参照。論文中におけるロシア以外の国の映画会社、映画作品の名称は本書を参考とした。

³ サドゥール『世界映画全史4』23頁を参照した。

ブリュッセルと並びモスクワとペテルブルグにパテ社の代理店が開設された。

モスクワに最初にできたパテの代理店について、ハンジョンコフは回想録の中で以下のように記述している。

「1904年、モスクワのガゼートニイ横町にパテ兄弟社の『蓄音機と映画の総合会社』という小さな店が開いた。この店の所長はカンメルであった。エジソンのフォノグラフとの戦いの中で、最も進取の気性に富むフランスの会社が、自社製品のために新たな市場を求めて東方に飛び込んだのである。」⁴

B. パテ社以後のロシア映画

パテ社が代理店を設立したとき、すでにロシア各地で映画の興行が行われていた。だがパテ社の進出はロシアの映画市場の勢力範囲、フィルムの配給経路に変化をもたらした。それがどのようなものであったのかを以下で見て行きたい。

映写機の普及

パテがモスクワとペテルブルグに代理店を開設した1904年には、すでに世界各地で映画作品や映写装置が発明・改良されていた。ハンジョンコフは1904年から1905年頃のロシアについて、以下のように述べている。「イリュジオンとか、バイオスコープとか、バイオグラフと呼ばれていた映画の数は急速に増加し始めた。」⁵ バイオスコープ、バイオグラフはいずれもアメリカの映画会社の名である。映画の興行師が、製造元の映画会社の名前を宣伝する際に用いたと思われる。ハンジョンコフの回想には、1905年にロストフ・ナ・ドヌーで映画の上映を予告する張り紙に「バイオグラフが開かれる」と書かれていた、とある。⁶ この時期には映画を指す用語が複数存在した。

こうしたことから、パテ社の代理店ができた1904年から1905年にかけて、ロシアにすでに複数の映画会社の製品が並立していたと見られる。

フランスの映画会社による寡占

1904年にパテがモスクワ代理店を開き、パテ社の映画販売店には多くの購買客が訪れた。モスクワにおけるパテ代理店の繁盛ぶりを知るや、ゴーモン社もペトロフスキイ・パ

⁴ Ханжонков А. А. Первые годы русской кинематографии: Воспоминания. М.-Л., 1937. С. 12. より引用。

⁵ Ханжонков А. А. С. 12. より引用。「映画」の原語はここでは「кинематограф」である。ハンジョンコフの回想録では「кинематограф」は映画を上映・鑑賞するという行為全体、および映画産業の意味で用いられている。

⁶ Ханжонков А. А. С. 12. を参照。

サージュに大きな代理店を開いた。1904年以降、ハンジョンコフの回想に見られるように、アメリカやイギリスの映画も少ないながら輸入され、上映されているが、1904年以後の数年間はこの二社がロシアで事業を拡大し、ロシアの映画市場をほぼ掌握した。⁷

パテとゴーモンを比較した場合、ロシアにおいて事業だけでなく、文化的影響がより大きかったのはパテ社である。パテは早くも1904年にはロシアを題材にした映画を制作した。⁸ 1907年にはロストフ・ナ・ドヌーとキエフに代理店を開設し、⁹ 圧倒的な競争力を背景にロシアの映画市場に出回る作品の多くを配給した。¹⁰ パテ社はロシア国内随一の配給会社となり、さらにロシアにおける映画制作にも進出した。1904年頃以降、ロシアの映画館に掛かる作品の大半がフランス映画で、そのうちほとんどをパテが独占する状態が1908年まで続いたといわれる。¹¹

1904年のパテ社の進出以降、パテ本社のフィルム生産力や市場での競争力により、ロシアの映画は、ヨーロッパ規模で進む産業化へ向けて一步を踏み出したのである。

II. ロシアにおける初期の映画 1903年から1908年まで

A. ハンジョンコフ社の設立と初期の活動

ロシアにおける映画の興業が、パテ社の進出を受けて劇的に変化したわけではない。だが従来の興業形態が存続する一方、市場に出回るフィルムの増加や映画人気の高まりにともない、新たに映画の配給や興業を担う者たちが現れた。その一人がハンジョンコフである。彼が設立したハンジョンコフ商会は、後にロシア映画を牽引し、その発展に多大な貢献をする映画会社へと成長する。ハンジョンコフが会社を設立するいきさつを当時のロシアの映画を巡る状況と関連づけながら追うことにしたい。

1903年—1905年の映画上映と映画館

ロシアがはじめて映画制作に成功したのは1908年のことである。それ以前にはロシアに出回っている映画作品は大半がフランス製で、そのほかはアメリカ、イギリス、イタリ

⁷ Ханжонков А. А. С. 12. を参照。また Jey Leyda, *Kino: A history of the Russian and Soviet film*, (London: Allen & Unwin, 1960), p. 24. を参照した。

⁸ *The American Film Institute catalog of motion pictures produced in the United States: Film beginnings, 1893-1910*, compiled by Elias Savada, (Metuchen, N. J.: Scarecrow, 1995), p. 928. を参照した。

⁹ サドゥール『世界映画全史4』22頁を参照。

¹⁰ ネーヤ・ゾールカヤ (扇千恵訳)『ソヴェート映画史 七つの時代』ロシア映画社、2001年、12-13頁を参照。

¹¹ Leyda, p. 24. 参照。ジョルジュ・サドゥール (丸尾定・村山匡一郎・小松弘訳)『世界映画全史6 無声映画芸術への道——フランス映画の行方 [2] 1909-1914』国書刊行会、1995年、8頁を参照。

アなどから輸入した外国映画であった。

1904年から1905年ごろ、ロシアで外国映画がどのように上映されていたのかをハンジョンコフは回想の中で記している。

初期に現れたのは興行師たちによる巡回映画である。興行師は外国で映写機と映画フィルムを買い付け、発電機、ときには照明器具まで携えてロシアの各地を移動し、上映して回った。各地で稼ぐと、興行師たちは使い古したフィルムや機材を売り払い、再び外国に出かけて新しいものを買い付けて新たな巡業に出た。

映画は船の上にもやってきた。1906年には、ボルガ川に映画館の設備を備えた船が登場した。その二年後、さらに同様の映画を上映する船「ナヤダ号」が登場し、短い間ではあったがボルガ河沿岸の各地で映画の上映を行った。

それとは別に、物置小屋や納屋、倉庫、店舗を利用して、映画が上映された。観客席の中に映写機を設置し、リンネル製のスクリーンを打ち付けてベンチを並べただけの簡単なものである。スクリーンの下でピアノを演奏することもあれば、観客用の腰掛けが用意されないこともあった。ときには屋外でも映画の上映が行われた。¹²

モスクワの中心部では1903年に早くも映画館が開設された。トヴェルスカヤ通りにはヘンツェルの「イリュージオン」という映画館ができた。1906年秋には元時計屋のハフトマンがストレッチェンカ通りとアルバート通りに二つの劇場を開設した。名は「グランド・パリジャン・エレクトロ」と「ユニオン」。¹³ 同じく1906年に高級ホテルのメトロポールが、舞踏室の一つを映画館「モデルン」に改装した。

ロストフ・ナ・ドヌーの映画館とハンジョンコフ商会の設立

ハンジョンコフが映画の道に進むきっかけを作ったのは、ロストフ・ナ・ドヌーにできた映画館だった。1905年のことである。その映画館は、空き店舗を改修しただけの簡単な作りだった。改修の間、そこには有名な興行主 R.シトレメルが近々バイオグラフの上映を行うという内容のポスターが貼られていた。いよいよ開業の日、電飾を施した入り口には観客が殺到し、整理のため警察が介入する騒ぎとなった。この映画館の上映時間は20-30分程度で、あわせて4つの映画が上映された。

『迫り来る汽車』という映画では、こちらに向かって走ってくる蒸気機関車の映像に観客たちが悲鳴を上げ、『ハエ』という題のコメディ映画では陽気な笑い声が上がった。映画館の中は大変な盛り上がりを見せた。他には『研磨工』というコミカルな追いかけっこを内容とする作品と、『静かな海で押し寄せる波』というタイトルの風景映画が上映され

¹² 巡回映画、映画線、その他の上映場所について Ханжонков А. А. С. 11-12. を参照。

¹³ Leyda, p. 24-25. を参照。

た。このとき映画に魅了されたのはハンジョンコフだけではなく、町中が映画の話題でもちきりだったという。¹⁴

映画館の標準的なプログラムは一回にドラマを 2-3 本と、科学的な内容の映画を 1 本、風景映画と言われる海や山の美しい情景を撮影した映画を 1-2 本、喜劇・夢幻劇を 3-4 本というものである。入れ替え時間を含め、全部で上映時間は 30 分ほどだった。¹⁵ ただしこれは 1905 年よりも少し後の時代のものである。ハンジョンコフが入ったロストフ・ナ・ドヌーの映画館のプログラムは数が少なめだが、上記の構成とほぼ同じである。

この後ハンジョンコフは知人に頼まれてモスクワのトヴェルスカヤ通りにあるパテの代理店に出かけた。そこでハンジョンコフは「シネマ」部門という映画作品の売り場で勤務していたエミール・オシという若者と出会う。ハンジョンコフとオシは意気投合し、二人で映画を輸入販売する会社を設立することを決めた。それからオシはパテ社を辞し、ハンジョンコフは退役して共同出資による会社「Э. Ош и А. Ханжонков商会」Торговый дом «Э. Ош и А. Ханжонков»を設立した。¹⁶ 1906 年の初め頃と見られる。

1904 年から 1907 年までのロシアにおける映画配給

ニュース映画や風景映画のわずかの例外を除き、ロシア人による映画制作が成功していなかった 1907 年までのロシアでは、上映される映画のほぼすべてが外国から輸入されたものであった。映画フィルムだけでなく、映写機やニュース映画の制作に用いられた撮影機など映画に関わる機材も外国から輸入された製品で占められていた。

この時期、ロシアで上映される映画はどのような仕組みで国内各地に供給されていたのだろうか。

前述したように、最も初期には、興行師たちが個別にフランスをはじめとする外国に出かけてフィルムや映写機を買い付けたのち、自分で各地を上映して回った。

1904 年以降、パテやゴーモン代理店がモスクワに開設される。当初パテの代理店は、映画の販売所はトヴェルスカヤ通りのそばにある、ガゼートニイ横町という目立たない場所にあったが、映画の購買者が急増したためパテ代理店はトヴェルスカヤ通りの建物に移転した。ハンジョンコフも知人に頼まれてまずトヴェルスカヤ通りのパテの店を訪れている。代理店は繁盛し、それまで外国から映画を直接買い付けていた興行師たちに代わって、パテやゴーモン本社から映画を輸入し、ロシア国内の興行師や映画館を相手に販売する機能を果たした。

¹⁴ ロストフ・ナ・ドヌーの映画館については Ханжонков А. А. С. 12-13. を参照。

¹⁵ Leyda, p. 14. 参照。

¹⁶ Ханжонков А. А. С. 13. を参照，

映画の産業化という視点で見ると、ロシアで代理店の存在が大きくなってきたことは、単に映画の購入を便利にただけではない。パテやゴーモン、イギリスのアーバンなどの映画制作会社は、大規模なスタジオを建設し、フィルムを現像し、複製するための大規模な工場を作った。そして国外の代理店を増やし、映画市場をヨーロッパ、アメリカ、アジアにまで拡大することを目指した。映画は「パテの時代」と呼ばれる産業化と大量生産の時代に入った。モスクワやペテルブルグの代理店は映画の産業化時代の到来をロシアに告げ、ロシア国内における映画の供給・上映システムに直接の作用を及ぼす存在となった。まさにこの時期にハンジョンコフ社は、外国映画の買付・販売だけでなく外国の映画制作会社との代理権を取得し、代理店の一つとして第一歩を踏み出した。

B. ハンジョンコフ社の代理店業務に見る 1906 年から 1908 年までのロシア映画

各国映画会社の代理店は、ロシアの映画において不可欠の存在になっていた。だがその具体的な業務や契約内容からは、代理店の運営が決して楽なものではなかったことがうかがえる。ハンジョンコフ社の代理店の仕事内容を追いながら、当時の映画制作会社と代理店との関係や、代理店の業務内容を分析する。

代理店の仕事

代理店の本社との関係や、業務の内容を詳しく見ていきたい。ハンジョンコフ社を例にとって 1906 年から 1910 年頃までの代理店業務の内容をまとめると、以下のようになる。まず代理店の業務は、本社と代理店契約を結ぶところから始まる。例えばフランスの映画会社の代理店となることを希望する場合、ロシア人の企業家がフランスの本社に赴き、ロシアにおける代表権を取得するという形で代理店契約を結ぶ。とくにパリは、ヨーロッパの有力な映画会社が集まっていたため、代表権交渉はパリで行われることが多かったようである。これは期限付きの契約なので、期限が来たら更新しなくてはならない。また代表権を行使できる地域がロシアの範囲内で具体的に設定される場合がある。

代表権の基本的な内容は、本社が著作権を有する映画作品をロシア国内の決められた地域で独占的に販売することである。それ以外に、本社が製造する映写機、撮影機などの機材の販売も請け負うことがある。こうした具体的な内容は、代表権交渉の場で決められるため、ロシアの代理店の側は、交渉内容を有利にする為の努力が欠かせない。¹⁷

ハンジョンコフ社の代理店業務 1906 年から 1908 年まで

どの映画会社と代理店契約を結べるかは、その後の会社の命運を左右する。できるだけ有力で、質の高い製品を供給する映画会社の代表権を得ることがハンジョンコフ社の当初

¹⁷ 代理店業務の内容について Ханжонков А. А. С. 14-18. を参照した。

の重要な仕事であった。

たとえばハンジョンコフの場合、共同出資者であるオシとともに 1906 年にフランスに赴き、パリでイギリスを本拠とするアーバン社と代理店契約を結ぶことに成功した。ハンジョンコフ社は現地で一万ルーブル相当の映画フィルムを購入した。五千ルーブルを現金払いし、残りの五千ルーブルをクレジットで支払った。ハンジョンコフはモスクワに帰る途中でワルシャワの劇場主たちを相手に、またモスクワに戻ってからはモスクワの劇場主たちを相手にそのフィルムの試写会を開いた。その後、フィルムの売上の交渉を、作品ごとに劇場主と直接行うのである。このときに集まったモスクワの劇場主たちの中には、モスクワ市内に「グランド・パリジャン・エレクトロ」「ユニオン」という二つの映画館をもつハフトマン、映画館「イリュジオン」のヘンツェルのほか、「グランド・エレクトロ」のアブラモヴィチ、アルクスネ、アクシユクがいた。¹⁸

アーバン社の代理店時代

だが、この頃の代理店契約は割のよいものではなかった。ハンジョンコフ社はアーバン社から映画フィルムを一作品につき 6 部から 12 部購入していた。1 メートルあたりの原価が約 40 コペイカ。公定の販売価格が 55 コペイカと設定されていた。つまり作品の販売に際しては 1 メートルあたり 15 コペイカしか利益が見込めなかった。値引きして売ることもあり、一部でも売れ残るとほとんど利益が出なかったとハンジョンコフは回想している。

その上、アーバン社から一度購入した作品は、売れ行きが悪かったり粗悪品であっても返品することができないというハンジョンコフ社にとって不利な契約内容になっていた。また、ハンジョンコフ社の代表権の中には、アーバン社製の映写機などの機材の販売も含まれていた。しかしアーバン社の機材はパテなどの他社製品に比べて品質が劣っていたために売れ行きが悪かった。¹⁹

アーバン社の代理店として働くハンジョンコフ社の経営はあまりに苦しく、翌 1907 年に、ハンジョンコフとオシは手分けして打開策を講じた。その活動を見ると、アーバン社と結んだ代理店契約の内容がより具体的にわかる。

ハンジョンコフはロシア各地を回り、すでに常設の映画館がいくつか建てられていたキエフでハンジョンコフ社がもっていた代表権をキエフの企業家に譲った。ロストフ・ナ・ドヌーでも、現地で映画の仕事経験がある人物に代表権を譲り、その人物の助けを借りて

¹⁸ Ханжонков А. А. С. 14-18. を参照した。

¹⁹ アーバン社との契約内容については Ханжонков А. А. С. 14. を参照。

在庫に余っていたアーバン社製の質の悪い機材を売り払うことに成功した。²⁰

このことからハンジョンコフ社は、アーバン社の代表権を取得した当初、モスクワ、キエフ、ロストフ・ナ・ドヌーを含む広い範囲での代表権をまとめてアーバン社から得ており、地域ごとの代表権は売買することが可能だったと見られる。この活動は、経営危機を脱する目的で行われたものであったことから、地方都市における代表権を譲ることで利益を得、アーバン社との代理店契約にまつわる負担を軽減しようと考えたことがわかる。またアーバン社の機材も、映画作品と同様、本社に返品ができなかったと見られる。

複数の映画会社の代理店時代

ハンジョンコフはさらにヨーロッパにある、知っている限りの映画会社に代表権獲得のための手紙を送った。アーバン社以外の会社と代理店契約を結ぶことで会社を建て直すとしたのである。結果、イギリスのヘップワース社との代理店契約を成立させた。このときハンジョンコフは、自社の売り上げに応じてヘップワース社に代金を払うという有利な条件を契約に盛り込むことに成功した。

一方、そのころオシは船でアメリカへ向かっていた。当時、ロシアにおいて質が高いと評判だったアメリカ映画を買い付けるためである。オシは映画フィルムと機材を仕入れてきた。しかしいざ映画を見ると、内容がお粗末で、機材も使い物にならないことが判明した。この手痛い失敗のあと、オシは会社から手を引いた。²¹

このあとハンジョンコフは、一時的に事務所を閉鎖し、資金をかき集めてヨーロッパに出かけた。そしてベルリンで「テオフィル・パテ」社の代表権の獲得に成功した。テオフィル・パテは、フランスのパテ兄弟社の子会社にあたり、その映画の質は三流映画と言われるが、²² ハンジョンコフによれば、機材の質は決して低くなかったようである。²³

さらにハンジョンコフは「ドイチェ・ビオスコープ」社の代表権を獲得した。アーバン社との代理店契約の教訓を生かし、ハンジョンコフはこのとき、契約内容に出来の悪い見本を返却する権利と、1メートルあたりの価格の引き下げを盛り込むことに成功した。さらに、ハンジョンコフは「ジオルジュ・マンデル」社の代表権も手に入れた。²⁴

前述のとおり代表権には期限が設定されたため、期限が来ると代表権を更新するか、打ち切られて別の会社の代表権を獲得し直すことになった。ハンジョンコフとテオフィル・パテの代表権の期間は一年ほどであったと見られる。1908年、ハンジョンコフ社はテオ

²⁰ Ханжонков А. А. С. 16. を参照

²¹ Ханжонков А. А. С. 15-16. を参照。

²² サドゥール『世界映画全史 4』25 頁を参照。

²³ Ханжонков А. А. С. 18. を参照。

²⁴ Ханжонков А. А. С. 18. を参照。

フィル・パテ側の事情で代表権を更新せず、パリのエクレール社の代表権を獲得した。²⁵

上述した内容は、1906年から1908年のハンジョンコフ社の活動である。パテ社が中心となって映画の産業化を推し進めた時代が1903年から1909年、ロシアに初の映画会社の代理店ができたのが1904年のことである。ハンジョンコフ社の活動はフランス、イギリス、ドイツ、アメリカのロシアに会社が進出し、各国の大手映画会社が映画の作品と機材の販売競争を始めた時代と重なっている。実際にはパテなど早くから代理店を出した会社がロシアの映画市場で有力であった。ハンジョンコフ社は後発の代理店として、新たな映画会社の作品をロシアにもたらす一方、ときに苦しい戦いを強いられた。ハンジョンコフ社の活動から、この時代におけるロシアの映画会社の活動の実態を知ることができる。

III. ロシア映画の発展 1908年以後

A. 各国の映画制作会社によるロシア進出

こうしたハンジョンコフ社をはじめとする代理店の活動を通じて、ロシアにおける映画興業は活況を呈した。だがそれさえも1908年以後の映画の発展から見れば小さな変化に過ぎなかった。1908年を境にロシアは、映画制作や配給をめぐり、ロシアを含む各国の映画会社の競争の舞台となる。以下では、ロシアにおける映画制作の始まりにともない、映画市場がどのように変化したのかについて考察する。

1908年「ステンカ・ラージン」

ロシアの映画を巡る状況が劇的に変化するのには、1907年から1908年のことである。

1908年はロシアの映画史においては画期的な年だった。この年の秋にロシア初のロシア製の大作映画「川下の盗賊団」²⁶が公開されたのである。制作はペテルブルグに本拠地を置くドラニコフ社、封切りは1908年10月15日のことであった。この作品は通常、多くの映画史の資料において通称である「ステンカ・ラージン」がタイトルとして普及しているため、以下では「ステンカ・ラージン」と記述する。²⁷

「ステンカ・ラージン」はロシア国内で大変人気が高く、観客の動員数は鰻登りとなった。ドラニコフ社はロシアの内外に、ロシアでロシアの会社による本格的な映画制作が始まったことを知らしめたのである。

²⁵ Ханжонков А. А. С. 22. を参照。

²⁶ «Понизовая вольница»

²⁷ 封切り日は Русское кино. 1908-1918. Сост. Ханжонкова В. Д. М., 1969. С. 38. を参照。及び, Leyda, P. 35. を参照。

パテ社の映画制作事業、ロシアへ進出

実際にヨーロッパ各国の映画会社がロシアで映画制作が始まることを知ったのは 1907 年にドランコフ社が「ロシア初の映画制作会社」というふれこみで広告をロシアやフランスの新聞に出したときのことである。中でもドランコフ社の動きをみて、ロシア製の映画の誕生がすぐそこに迫っていることをいち早く予測したのはパテだった。

パテ社は早速、1907 年からロシアでロシア人の俳優を使った映画の制作を試みた。これは成功しなかったが、ロシアを題材にした映画を制作し、早くも 1908 年 2 月には「ドンのコサック」(135 メートル) という映画を公開した。この映画は成功し、2 週間足らずで 290 部を売り切った。ロシア国内では、この映画を繰り返し見た観客もいたほどの人気を博した。²⁸

1908 年頃から、パテはフランスの自社のスタジオで映画を制作するだけでなく、イタリアやロシアに監督やカメラマンを派遣し、それぞれの国の歴史や物語を題材とした映画の制作を始める方針を打ち出した。²⁹

ロシアフィルム社の活動

1908 年、フランスでは映画会社の再編が起こり、また新しく設立された映画会社フィルム・ダールにより映画制作にも大きな進歩がもたらされた。パテは、フィルム・ダール製の作品の興業を一手に引き受け、さらにフィルム・ダールと共同してロシアにおける映画制作を開始した。³⁰ パテはフィルム・ダールの協力の下、フランスから監督やカメラマンをロシアへ派遣し、ロシア人の俳優を使ってロシアにおける映画制作に乗り出した。³¹ 1909 年 10 月にはパテ社がロシアに設立した子会社であるロシアフィルム社 (Le Film Russe) の初作品が上映された。³²

ロシアフィルム社の制作するすべての映画には、ロシア語のタイトルと並んでフランス語のタイトルがつき、フランスをはじめ、ロシア以外のヨーロッパ諸国にも配給された。むしろそちらの興業が主であった。従って「マゼッパ」「ドミートリイ・ドンスコイの生涯における一つのエピソード」「ピョートル一世」など、ロシア以外の国々で受けそうなエキゾチシズムの濃い題材が多かった。これらの作品はロシア以外の国でも優れた興行成

²⁸ Leyda, p. 22. を参照。

²⁹ サドゥール『世界映画全史 6』64 頁を参照。

³⁰ フィルム・ダールについてはサドゥール『世界映画全史 4』403-413 頁を参照。

³¹ Leyda, p. 37-38. 参照。

³² *Pathé premier empire du cinéma, Directeur de l'ouvrage Jaques Kermabon*, (Paris: Centre Georges Pompidou, 1994), p. 65. を参照。

績をあげた。³³

パテ社の制作作品のカタログには、ロシアフィルム社などパテの子会社の制作した作品も含め全作品の情報を見ることができる。ここで 1910 年にロシアで公開されたロシアフィルム社の映画、「ピョートル一世」を例に挙げる。カタログには、映画を制作したスタッフとメインキャストの名が記されている。シナリオはヴァシリイ・ゴンチャロフ、監督はカイ・ハンセンとヴァシリイ・ゴンチャロフである。カメラマンはジョルジュ・メイヤーとタピ。俳優はロシア人であり、ピョートル一世役にパーヴェル・ヴォイノフが起用された。映画の内容に関しては、ロシアを文明国へ導いた専制君主で、その残酷さにもかかわらず歴史上に偉大な足跡を残したピョートル一世の物語である、という説明がなされている。

さらにフィルムの公開日、場所が記してある。最初に封切られたのはフランスのボルドーで、1910 年 5 月 20 日から 26 日にかけてである。この映画は 315 メートルとされているが、これはフランス向けに編集したバージョンである。ロシアで公開されたフィルムは 590 メートルとそれより長く、リール 3 巻分あった。ロシアではフランスより少し遅れて 6 月 1 日に公開されている。³⁴

各国の映画会社がロシアへ進出

パテを見て、他の映画会社もロシアに進出を始めた。イタリアのグロリア社がスタジオを建て、イタリアのチネスがモスクワに支社を設けた。1908 年にテオフィル・パテも、それまでハンジョンコフと結んでいた代理店契約を打ち切り、ロシアで映画の機材を販売するために、モスクワに支社を設立した。1908 年に、ロシアにおける映画機材の需要は急速に高まったと見られる。

さらに、代理店も増加した。1908 年にドゥスケス社³⁵ クリックス・アンド・マーティン社、バイオスコープ社、リュクス社、ヴァイタグラフ社がロシアに代理店を開いた。³⁶ 1909 年までにはウォーリク社、マスター社、アンブロジーオ社、ノーディスク社がロシアに代理店を開いた。³⁷ハンジョンコフは 1908 年にイタラ社の代表権を取得し、イタラブランドの機材の販売網を組織した。イタラ社の豊富な映画の販売も行った。³⁸

1908 年以降、それまでロシアを市場としなかった会社が、次々に話題作をロシアに送

³³ Leyda, p. 36 参照。

³⁴ *Catalogue Pathé des années 1896 à 1914: 1910-1911* (Paris:Henri Bousquet, 1994), p. 277. 参照。

³⁵ サドゥール『世界映画全史 4』253 頁参照。ベルリンの映画会社。

³⁶ Ханжонков А. А. С. 22. 参照。

³⁷ Leyda, p. 36. 参照。

³⁸ Ханжонков А. А. С. 22. 参照。Leyda, p. 32-33. 参照。

り込んだ。ハンジョンコフはフィルム・ダールの映画をはじめロシアに公開し、「アルルの女」「ギーズ公の暗殺」はロシアで大人気となった。エクリプス社によるメッシーナの大災害を撮影したニュース映画も評判となった。ゴーマン社はエミール・コールによる初めてのアニメーション作品をロシアで公開した。日露戦争を撮影したイギリスのフィルムも公開された。³⁹ ロシアにおける映画制作の開始は、各国の映画会社が進出する上での呼び水となり、ロシアの映画市場にかつてないほどの活況をもたらしたのである。

B. 1908 年以降のロシア映画産業の発展

ロシアの会社による映画制作の開始と各国の映画会社の進出はロシアの映画市場を豊かにした。その量的変化は映画館や観客数の増加ばかりでなく、配給制度などの質的变化をもたらした。以下では配給制度の確立、映画館の営業形態の変化、そしてそれに連動する映画館の増加を検証する。

映画館の増加 1907 年から 1908 年

1907 年から 1908 年にかけてロシアでは映画館が急速に増えた。政府が映画館の急増に対応するための規則を公布したほどであった。映画館同士が 300 メートル離れていなくてはならないとする規則から、夜 9 時には閉館しなくてはならない規則も出された。しかし間もなく観客の要望で夜 11 時に延長された。⁴⁰

新聞・雑誌では、映画館を火事と蒙昧と墮落の温床として激しく非難する記事も書かれた。⁴¹ 映画は健康に悪いとする医者や、聖職者たちの反発は根強かった。しかしこうした圧力にも関わらず、映画の観客数は増す一方だった。

だが、映画館でたびたび生じる火事の被害は実際に深刻だった。初期の映写機は時々爆発を起こし、火を噴くことがあった。映写技師の負傷はもちろん、劇場全体が火事になることも少なくなかった。⁴² 1910 年のペテルブルグでは 10 件もの映画館が火事で失われたという。⁴³

モスクワには、1908 年を境に大きな映画館が次々と建った。それまではモスクワで代表的な映画館にはトヴェルスカヤ通りの「イリュジオン」などがあったが、それらの映画

³⁹ Leyda, p. 34. と Ханжонков А. А. С. 22. を参照。パテ社やイギリスのロバート・ウィリアム・ポール、アーバン社などが日露戦争を撮影した。The American Film Institute catalog of motion pictures produced in the United States: Film beginnings, 1893-1910. pp. 927-929. を参照。

⁴⁰ サドゥール『世界映画全史 6』57 頁参照。

⁴¹ Ханжонков А. А. С. 26. を参照。

⁴² Leyda, p. 30. 参照。

⁴³ Leyda, p. 47. 参照。

設備は時代遅れになり、以前からある劇場は設備の刷新を行った。また新しい映画館の増加にともない、映写機をはじめとする映画館の設備の需要が高まった。この時期のモスクワで代表的な映画館としてハンジョンコフは、「グランド・エレクトロ」「ユニオン」「モデルン」「オデオン」「コンチネンタル」「エクスプレス」「ブルカン」「ファルス」「クラスナヤ・メリニツァ」「メフィストフェレス」を挙げている。⁴⁴ ロシアには電気設備、音響設備など部門別に劇場主たちと取引を行う映画館の為の機材納入業者も登場した。⁴⁵

前述したように、1908 年以降、各国の映画会社は大きな市場をロシアに見だし、代理店や支社の設立に乗り出した。映画会社の商品には、映画作品と並んで撮影機と映画館設備が含まれていた。

パテ社、ゴーモン社をはじめ、ヴァイタグラフ社、ビオスコープ社などはもともと撮影機や映写機を販売していた。ジョルジュ・マンデル社も、写真機や写真製品の販売を行っていた。1900 年にはゴーモン社の映写機がフランス国内の市場の大半を占めていが、1902 年からパテ社が映写機の制作に力を入れた。そしてこの部門においてもパテ社の成長はめざましく、1908 年には 2 万件弱の映画館数に対して 1 年間に六千台の映写機を販売したといわれる。フランスのみならずヨーロッパ各地の映画館がパテの映画設備を備えた。1913 年にはパテの映画設備を備えていたロシアの映画館は、全体の 60 パーセントに上った。⁴⁶

映画フィルム貸出業者の登場

1908 年の映画館の増加と各国の映画会社のロシア進出は、ロシアにおける映画の供給システムにも変化をもたらした。映画館の増加は、ロシア国内で必要とされる映画の本数を引き上げた。さらに、この時期の映画館は上映サイクルが短かった。通常、一週間に一回の割合でプログラムを変えた。競争が厳しくなると、それが一週間に 2-3 回に増えた。映画館によっては、毎日違う作品を探し回るところもあった。⁴⁷ 競争が上映される映画の総数を引き上げた。

また、1908 年には前述の通り、外国の映画会社の支社や代理店がロシアに進出し、自社の映画作品を次々とロシアに送り込んだ。1908 の春には早くも、ロシアの映画市場において外国映画が供給過剰となった。⁴⁸

この頃までは、映画館がハンジョンコフのような代理店から外国映画のフィルムを購入

⁴⁴ Ханжонков А. А. С. 26. を参照。

⁴⁵ Ханжонков А. А. С. 26. を参照。

⁴⁶ サドゥール『世界映画全史 4』69-70 頁参照。

⁴⁷ 映画館の標準的なプログラムについては、Leyda, p. 28. 参照。

⁴⁸ 供給過剰になった時期については、Ханжонков А. А. С. 26. を参照。

して上映するのが一般的であった。しかし市場に外国映画があふれかえり、映画館が買い込むフィルムは競争の中で膨大な量に上った。結果、映画館は大量の映画の在庫を抱えることになった。⁴⁹

こうした状況下で、1908年、ロシアで映画の貸し出しシステムが確立した。そこで「ユニオン」のハフトマンや「グランド・エレクトロ」のアブラモヴィチなど、大きな映画館の劇場主たちは在庫を有効利用するべく、地方へのフィルムの貸し出しを始めたのである。1908年夏にはフィルムの貸出業は市場における法律の認可を受けた供給形態となった。⁵⁰ 映画フィルムは映画館に販売されるのではなく、貸し出されるのが一般的になった。

ハンジョンコフ社の配給する映画

ハンジョンコフ社は、自社が配給する映画の目録を毎週発行していた。⁵¹ 時期は少しずれるが、1912年から1913年までに発行された目録を見ると、目録1号に付き、9本から11本の新作映画が掲載されている。つまり一週間に、10本近くの映画がハンジョンコフ社から売り出されていたことになる。ここに掲載されている映画の制作会社はエイコ・フィルム、チネス、パスクァーリ、イタラ、チェリオ、リュクス、ヴィタスコープ、アクィラ、ハンジョンコフ、ポレルである。

この目録は、フィルムを購入する業者向けのカatalogである。1912年にハンジョンコフ社の映画を買ったのは、映画を劇場に貸し出す仲買人だと思われる。ハンジョンコフ社の目録には、映画のタイトル、制作会社、映画の内容、検閲番号、メートル数、値段、そして電報用にタイトルの略称が示してある。電話、郵便と並び、電報がロシア各地の購買者とハンジョンコフ社との連絡手段であった。

値段を見ると、例えば1912年11月27日から12月1日までの目録第270号では、『名誉の問題』は354ルーブル(644メートル)、『死の呼吸』は440ルーブル(785メートル)、『別荘亭主』は108ルーブル(216メートル)なので、当時の慣例に従い1メートルあたりの値段を出すと、大体55コペイカになる。ハンジョンコフによると1906年の時点で映画のフィルム1メートルあたりの値段が55コペイカと決まっていた。1912年時点でもこの標準価格は維持されていたものと見られる。

映画館の増加 1909年から1910年

1909年から10年にかけて、映画館はさらに増えた。ハンジョンコフは、モスクワに新

⁴⁹ Ханжонков А. А. С. 26. 参照。

⁵⁰ Ханжонков А. А. С. 25-26. を参照。

⁵¹ Ханжонковъ и К: Програма. 1912, №270. 1912, №271. 1913, №279. 1913, №283. を参照。

設された映画館として「鉄道会館」「技術会館」ほか、5つの映画館を挙げている。⁵²

この時期になると映画館はかなり改善され、郊外の町であってもロビーやビュッフェ、クロークルームが必ず備えてあった。上映に際して優れたピアニストによる伴奏がついた。それまでは喜劇映画ならギャロップ、ドラマならワルツと、映画のジャンルに応じて伴奏曲の種類が決まっていたが、伴奏の仕方にも多様性が現れ、大きな映画館の中には3-5人のアンサンブルオーケストラを登用するところも出てきた。⁵³

1910年のペテルブルグでは22の映画館が新たに開いた。そのうち火事で10件がなくなり、結果、全部で84館の映画館が存在したという。⁵⁴

統計資料に映画館の増加は反映されているのだろうか。1904年と1910年に実施された、ロシア帝国領内の自治体ごとに二十数項目に渡る統計調査を参照する。⁵⁵ この中には人口、教育機関の数などと並んで劇場数の統計が掲載されている。

劇場の内訳は1904年の統計では「劇場」(театры)〔表ではIとする。以下同様〕と「民衆の会館」(народные дома)〔II〕の2項目、1910年の統計では「常設劇場」(постоянные театры)〔A〕、「仮設劇場」(временные театры)〔B〕、「会館、その他の舞台」(клубные и иные сцены)〔C〕、「民衆の家」(народные дома)〔D〕の4項目に分かれている。統計の数値の比較により、1904年の「劇場」は、1910年の「常設劇場」と「仮設劇場」の合計に相当すると考えられる。

この統計資料では「映画館」が項目として挙げておらず、さらに劇場の統計の中に映画館が含まれるかどうかを確認できない。だが当時、演劇と映画の両方を催す会場や、野外での上映会、小さな会館での上映会は一般的に存在していた。また項目にある「民衆の家」は地方の自治体や篤志家が設立した、誰もが利用できる施設で、映画の上映が行われる場合があったことから、映画館の増加を裏付ける参考資料として考慮の対象に加えることとした。

以下の表は、1904年と1910年の統計資料から同一の地域を選び、それぞれの年ごとに劇場数をまとめたものである。⁵⁶ 表1が1904年、表2が1910年のデータである。表には、論文のなかに登場した地域を選んでいく。ペテルブルグ、モスクワに加え、1907年の時点ですでに複数の常設の映画館があったとハンジョンコフが回想していたキエフ。パテの代理店が早い時期にでき、ハンジョンコフが映画の道に進むきっかけを作ったロストフ・

⁵² Ханжонков А. А. С. 44. 参照。

⁵³ Ханжонков А. А. С. 44. 参照。

⁵⁴ Leyda, p. 47. 参照。

⁵⁵ Города России в 1904 году. Центральный статистический комитет М.В.Д. СПб., 1906. Города России в 1910 году. Центральный статистический комитет М.В.Д. СПб., 1914. を参照した。

⁵⁶ 表1は、Города России в 1904 году. С. 39, 286, 456, 629, 631. 表2はГорода России в 1910 году. С. 33, 306, 309, 0127. を参照した。

ナ・ドヌーである。そのほかに論文中では扱わなかったが、ペテルブルグの近郊のノヴゴロド県、モスクワ近郊のサラトフ県を挙げた。この2県は、ロシアの映画産業の中心地であるペテルブルグとモスクワに近く、映画の成長が波及した地域と見られること、そして田舎における普及の度合いを知る目安になると考えられることが理由である。

1904年の統計資料ではペテルブルグ市の統計のみが記載されておらず、入手できなかったため、表1のペテルブルグ県の数値はペテルブルグ市内をのぞいたものとなっている。モスクワ県の数値は、モスクワ市内の数値と一致するため、ここではモスクワ市の数値だけを記載した。表1、表2ともに、県と、その県内の都市を併記した地域について、県の数値は都市の数値を含んだものとなっている。

地名	I	II
サンクト・ペテルブルク県 (サンクト・ペテルブルク市を除く)	7	1
モスクワ市	15	0
キエフ県	8	1
キエフ市	3	1
ドン軍管区	7	0
ロストフ・ナ・ドヌー	2	0
サラトフ県	2	2
ノヴゴロド県	3	1

表1 1904年における劇場

地名	A	B	C	D
サンクト・ペテルブルク県	23	10	43	14
サンクト・ペテルブルク市	22	2	30	6

モスクワ県	11	5	12	3
モスクワ市	10	5	2	3
キエフ県	8	3	22	8
キエフ市	3	0	13	2
ドン軍管区	7	5	15	2
ロストフ・ナ・ドヌー	3	0	5	0
サラトフ県	4	1	17	3
ノヴゴロド県	2	3	11	1

表2 1910年における劇場

ペテルブルグは1910年の時点で、4項目の合計数値が最も大きい。レイダの挙げた数値とは一致しないが、レイダが述べるように、最も映画館の数が多かった地域であることが推察できる。しかしペテルブルグ市の1904年のデータがないため、増加数を割り出すことはできない。

モスクワ市、キエフ市については1904年の「劇場」〔I〕と1910年の「常設劇場」〔A〕「仮設劇場」〔B〕の合計で比較すると、数値があまり変化していない。

それに対し、映画の上映に使われた可能性のある「民衆の家」〔II, D〕の数を比較すると、ペテルブルグ市をのぞくペテルブルグ県、またモスクワやキエフなど、ロストフ・ナ・ドヌーをのぞくすべての地域で増加が見られる。

また1910年の「会館、その他の舞台」〔C〕の数は大きい。これが唯一、1904年にはなく1910年に新たに加わった項目と見られる。6年の間に増えた新しい種類の劇場と考えてよいだろう。1909年から1910年にかけてモスクワにできた映画館とハンジョンコフが述べる「鉄道会館」は、Железнодорожный клубといい、ここでは映画上映の他にもハンジョンコフが映画撮影を行っている。多目的の建物であったと見られる。

また映画館の中には、常設劇場と言えるような独立した建物よりもむしろ建物の一角を

間借りしたものや商店を改装したものが多く、Cの項目に映画館が含まれる可能性は高い。とくにドン軍管区、及びサラトフ県やノヴゴロド県では、常設劇場や仮設劇場の伸び幅が小さいのに対し、Cの数値が高い。

以上のデータから、1904年から1910年にかけて、ロシアの各地域で劇場の総数は確実に増え、中でも映画館が属すると見られる、1910年に加わった新しい項目が最もめざましい増加を見せていることがわかる。その数値はペテルブルグ、モスクワ、キエフなどの大都市もさることながら、ドン軍管区、サラトフ、ノヴゴロドなど地方においても他の項目と比べたとき、特に大きい。映画の地方における普及の早さ、人気の高さとの数値が関連する可能性は高い。

スタジオの増加と、パテ社によるロシアでの映画制作

1910年までに、ロシアにおける映画の制作スタジオは15件となり、その中にはパテ、ゴーモンのような外国の支社が使用するものが含まれた。1910年にはイタリア最大手のアンブロジーオ社も参入する。⁵⁷

パテ社は1908年からすでにロシアで映画制作を行っているが、モスクワに巨大な映画撮影スタジオを建設したのは1912年のことである。⁵⁸ その間の撮影はどこかのスタジオを借りていたと思われる。その間の映画作品も品質に優れたものであることから、撮影の経験と技術さえあれば、ロシアで高い頻度で映画を制作できる環境が整っていたことになる。

このように1908年から数年の間にロシアでは映画の産業化が進み、興業、配給、制作の各分野においてめざましい発展が見られた。ロシアはヨーロッパやアメリカの映画会社にとって大きな市場となった。同時に都市部は映画制作の拠点として成長を始めた。ロシアの会社による映画制作を支えたのは、こうした多方面における映画産業の成長であった。

IV. ハンジョンコフ社の映画制作

A. ハンジョンコフ社、映画制作開始

ロシア人による映画制作は、ロシアにおける映画市場の活況と一体となって進められた。しかしその道のりは平坦ではなかった。ハンジョンコフ社は1907年に映画制作を開始するが、そのプロセスはロシア製の映画作品の産みの苦しみを体現したものだった。以下ではハンジョンコフ社の最も早い映画制作の試みを通じて初期の映画制作の実態に迫る。

⁵⁷ Leyda, p. 47. 参照。

⁵⁸ Pathé premier empire du cinéma, p. 102. 参照。

初の映画制作

初めて公開されたロシア製の映画は、ドランコフ社の制作した『ステンカ・ラージン』である。これは1908年の秋に上映された。だがそれ以前にも映画撮影機による記録フィルムやニュース映画はロシアでも制作されていた。ドランコフ社は1907年から1908年にかけて、「モスクワの失業者」、「ストリピンの私生活」のほか第三帝国議会の再開など多くのニュース映画を撮影した。⁵⁹ ハンジョンコフ社も1908年の夏から、カメラマンにシヴェルセンを起用してコーカサス山脈の暮らす人々や、官庁の依頼によりモスクワの環状線の建設風景などを撮影した。⁶⁰ 記録映画の制作に成功していたものの、映画に特有の方法で物語を進行させる本格的な映画作品は、まだ生まれていなかった。

だが映画を制作する試みは早くから行われていた。ハンジョンコフ社は1907年夏から映画制作に踏み切った。⁶¹

この当時のハンジョンコフの会社の主な業務は、外国の映画会社から買い付けてきた作品と機材を劇場に販売することだった。前述の通り、1906年から1907年はフランスのアーバン社の映画作品と機材を買い付け、ワルシャワとモスクワにある劇場主に販売した。だがこの仕事は利益が少なく、ハンジョンコフの会社の経営は行き詰まった。

そこで彼らが事態の打開を目指して取り組んだのが1907年の映画制作である。タイトルは『パーラチキンとガーラチキン』。撮影はモスクワ市内のソコーリニキ公園内にある舞台で行われた。オーケストラ用の舞台の上で行われる俳優の演技をカメラで撮影したのである。電気照明を使ったという記述がないが、フィルムに露光できていることから、野外の舞台である可能性が高い。だがこの作品は失敗に終わった。カメラの位置が低すぎたために、芝居は俳優の頭が切り取られた状態でフィルムに映っていたのである。⁶² このような初歩的な失敗からは、当時、まだハンジョンコフ社に映画制作に必要な技術や経験をもった人物が全くいなかったことがわかる。

ハンジョンコフ社、二度目の挑戦

ハンジョンコフ社の次の挑戦は1908年に行われた。ハンジョンコフ社がロシアで初めての「風俗映画」（生活の情景を撮った映画）を制作するという意気込みで望んだこの映画のタイトルは『モスクワ近郊のジプシー・キャンプの中のドラマ』である。ニュース映画の撮影経験のあるシヴェルセンをカメラマンに起用した140メートルの長さの作品で

⁵⁹ サドゥール『世界映画全史 6』60頁参照。タイトル名はサドゥールの表記にならった。

⁶⁰ Ханжонков А. А. С. 21. を参照。

⁶¹ Ханжонков А. А. С. 15. を参照。

⁶² Ханжонков А. А. С. 15. を参照。

あった。⁶³

ハンジョンコフ社はこの映画の撮影にあたり、愛、復讐、踊りを盛り込んだシナリオをつくり、実際に流浪の生活を送るジプシーたちを俳優として使った。その中には踊りのうまいジプシーの女性や美しい若者、年寄り、こどもたちたちがいた。だがこの撮影も失敗に終わった。その原因は二つあった。まず、ジプシーたちがカメラを前にすると恐怖に凍り付き、演技や踊りがぎこちなくなったことである。さらに、ネガとポジの両方がうまく焼けなかったことである。⁶⁴

ハンジョンコフとドラニコフ

同じ年の秋、ドラニコフ社はロシアで初めての劇映画「ステンカ・ラージン」の制作に成功し、上映した。ハンジョンコフ社は後れをとった格好になったが、ドラニコフ社の方がハンジョンコフ社よりもニュース映画の制作ですでに高い技術をもっていたことはハンジョンコフ自身が認めている。

ドラニコフ社の技術の高さは、ドラニコフ自身の経歴に裏打ちされていた。ドラニコフ自身は元タプロの写真家であり、イギリスのイラストレイテッド・ロンドン・ニュースやフランスのイリュストラシオンなど外国の新聞の写真記者やまたロシア帝国議会の専属写真家をつとめた。⁶⁵「ステンカ・ラージン」を撮影には、ドラニコフ自身がゴズロフスキイとともに、カメラマンとして参加した。⁶⁶

ハンジョンコフはドラニコフの間に仕事上の取引関係があったが、個人的にも親交があった。ハンジョンコフは回想録の中ではじめてドラニコフと出会ったときのことを以下のように書いている。

「私とドラニコフとの出会いはこれとほぼ同じ時期だった。ある時、事務所に快活な若者が入ってきて、自らロシア初の映画制作者、アレクサンドル・オシポヴィチ・ドラニコフと名乗った。彼は私に、彼のペテルブルグの会社の代表になってくれないかと持ちかけた。私は仕事過多を理由に断った。そうすると彼は、我が事務所を通じて自分の映画を販売することを許可してくれるよう頼んだので、私はこれを承諾した。彼は訪問の成果に満足して、私をペテルブルグにある彼の家に招待してくれた。1908年の始め、私はドラニコフの元を訪ねた。ドラニコフはツアーリの間近でツアーリを撮影したことを大いに自慢した。そのときに（撮影機の）レンズがなかったことや、警護官や侍従武官団を考慮に入

⁶³ Ханжонков А. А. С. 147. を参照。

⁶⁴ Ханжонков А. А. С. 21-22. を参照。

⁶⁵ Leyda, p. 31. 及び Русское кино. 1908-1918. С. 20. を参照。

⁶⁶ Русское кино. 1908-1918. С. 38. を参照。

れるためそれが難しかったこと、などについても話した。」⁶⁷

この記述から、ハンジョンコフとドランコフとの出会いは1907年から1908年初め頃と見られる。ドランコフがはじめてハンジョンコフにあった際、販売を依頼したのは自社制作のニュース映画である。

B. ハンジョンコフ社、映画制作の成功と苦勞

それから間もなく、ハンジョンコフ社は映画制作で成功を収めることとなるが、その後も制作会社として成長するための道のりは長く続いた。ハンジョンコフ社の映画制作は依然としてスタジオを持たず、設備も機材も不足し、技術さえも追いつかない中で行われた。以下ではハンジョンコフ社が、こうした不足を補うために題材選びや撮影においてどのような試行錯誤を行ったのかを作品ごとに取り上げる。

ハンジョンコフ社、初めての成功

ハンジョンコフ社は次の挑戦をするにあたって、ドランコフ社で「ステンカ・ラージン」のシナリオ作家を務めたV. M. ゴンチャロフを監督に起用した。ゴンチャロフ（Василий Михайлович Гончаров, (1861-1915)）は1908年以降、ロシアの映画の創生期に、映画制作の第一人者として活躍した映画監督である。⁶⁸ ゴンチャロフは元々、鉄道の所轄官庁に勤務していた。ロシア交通省の鉄道局と思われる。その後映画の道に進んだ。⁶⁹ ハンジョンコフに拠れば、ゴンチャロフは、パリにあるパテのスタジオで撮影技術を学んだ人物であった。ドランコフ、ハンジョンコフ、パテ、ゴーモンなどロシアにあった映画制作会社を渡り歩き、数々の映画を制作した。

キャストとしてモスクワのヴィジェンスキイ・ナロードニイ・ドームの俳優たちを選んだ。彼らの中にはモジュヒン、チャルディニンがいた。ハンジョンコフは、ジプシー映画での失敗をふまえ、プロの俳優を起用するよう方針を変えたのである。カメラマンには引き続きシヴェルセンが起用された。彼らとともにハンジョンコフは「カラシニコフの歌」「ツァーリの花嫁選び」「16世紀のロシアの結婚式」の三つの映画の撮影に臨んだ。

「ツァーリの花嫁選び」の制作はヴィジェンスキイ・ナロードニイ・ドームの舞台上での演技を撮影する方法で行われた。屋内での撮影ということもあり、通称「ユピテル」という強力な人工照明を4つ使って舞台を照らした。カメラは舞台の前にある中央通路に据えられた。優れた俳優たちを起用したにもかかわらず、リハーサルの演技は滑稽きわまる

⁶⁷ Ханжонков А. А. С. 21. より引用。カッコ内は大野による補足。

⁶⁸ Кино: энциклопедический словарь. М., 1986. С. 99. 参照。

⁶⁹ Русское кино. 1908-1918. С. 21. 参照。

ものだったとハンジョンコフは回想している。監督が秒刻みで時間を指示しながら演技指導を行ったために、俳優はまるでバネ仕掛けの人形のように走り出したり、ひれ伏すや否やがばっと起き上がるという不自然な演技をした。映画の撮影では舞台演劇とは勝手の違う演技が要求され、そのことによる混乱があったことを伺わせるエピソードである。結局、自然な演技に修正して撮影は無事に終了した。ふたを開けてみると、舞台装置が画面からはみ出していたり、背景の絵が真っ黒に映るなどいくつかの欠点があった。⁷⁰ だが「ツァーリの花嫁選び」「商人カラシニコフの歌」、「16世紀のロシアの結婚式」は商品化できる品質に仕上がっていた。

ハンジョンコフ社はここに来てはじめて上映に足る映画の制作に成功したのである。「商人カラシニコフの歌」は200メートルの長さの4場からなる劇映画で1909年に上映された。「16世紀のロシアの結婚式」は1909年、「ツァーリの花嫁選び」は1910年に上映された。⁷¹

ハンジョンコフ社の試行錯誤

その後ハンジョンコフは、ロシアの有名な文学作品を題材にした映画制作を行った。ゴーゴリ原作の『死せる魂』と『結婚』、ドストエフスキイの『白痴』などである。『死せる魂』の撮影は、鉄道会館で行われた。これはハンジョンコフが回想録の中で新しくモスクワにできた映画館の一つとして挙げている。⁷² 当時のハンジョンコフ社の映画撮影は、ほとんどが舞台の上で行われる演劇を撮影したものである。また記録に拠れば『死せる魂』の撮影は舞台の上で、演劇と同じような舞台装置を用いて行われた。鉄道会館は舞台で演劇や映画の上映を行う施設である。

『死せる魂』は役者のメーキャップや衣裳、身振り、舞台装置などの多岐に渡り、19世紀のイラストレーションを参考資料に用いている。⁷³ 監督としてヴィジェンスキイの俳優のひとり、チャルディニンを新たに起用し、撮影準備やリハーサルを任せた。だがこの映画撮影は失敗に終わった。鉄道会館には大きな窓がいくつもあり、ハンジョンコフたちは日光が十分にはいると過信し、人工照明をほとんど使わずに撮影した。その結果、露出に失敗しフィルムに映像がまともに映らなかったのである。ネガは使い物にならず、大半の場面が失われた。この失敗を機に、ハンジョンコフは自社スタジオの建設を真剣に考え

⁷⁰ Ханжонков А. А. С. 23. を参照。

⁷¹ Ханжонков А. А. С. 147-148. を参照。

⁷² Ханжонков А. А. С. 44. を参照。

⁷³ Гинзбург С. С. Дореволюционный кинематограф // Русская художественная культура конца 19-начала 20 века (1908-1917). М., 1977. Кн. 3. С. 241. 及びゾールカヤ『ソヴェート映画史 七つの時代』23頁を参照。

るようになった。⁷⁴

文学作品を映画に使う

初期のハンジョンコフ社の作品は、その多くがロシアですでに有名な文学作品や民間伝承、歴史上の出来事を題材としている。ハンジョンコフ社が1908年から1910年までに制作した映画の内、文学作品を題材としたものではゴーゴリの『死せる魂』『結婚』、レールモントフの『商人カラシニコフの歌』『大貴族オルシャ』『ヴァジム』『仮面舞踏会』、レフ・トルストイの『闇の力』、プーシキンの『ポルタヴァ（映画名マゼッパ）』『スペードの女王』『ルサルカ』、ドストエフスキイの『白痴』、ネクラースフの『行商人』などがある。これはハンジョンコフ社が制作した劇映画の半数以上を占める。

ハンジョンコフの回想録にある以下の記述は、なぜ文学作品が原作として多用されたのかの説明となっている。

「これらの作品の脚色は完全ではなかった。最も効果的な場面を作品の中から選び出した上、それらの場面同士の意味上のつながりについては特に配慮しなかった。観客がこんなに人気のあるロシアの文学作品を知らないなどということは恐らくなかろうと期待したのだ。」⁷⁵

1908年から1910年頃のロシア映画は、同時代のフランスやアメリカと比べて、制作のための設備や技術の点で劣っていた。フランスではゴーモン社が1905年に、幅45メートルのホールを有するガラス張りの巨大な撮影劇場を建設し、パテ社は1906年には一日に4万メートルのフィルムを焼きつける工場を完成させた。⁷⁶

一方、ロシアの映画制作会社はまだ映画撮影の専用スタジオをもっていない上、映画制作に長けた演出家が不足し、舞台美術や演出法、撮影機材や現像機など諸設備の整備の点で立ち後れていた。上記のハンジョンコフの記述からは、設備だけでなく、脚色や編集においても技術不足であったことを物語っている。ハンジョンコフ自身も、複数のエピソードの中で当時、自社の制作技術が不十分であったことを回顧している。

ハンジョンコフが言及している映画は、ロシアの映画史においてイラスト映画の名称で呼ばれる。これはロシアに制作技術や経験が不足していた時期に作られた、文学を原作とする作品群を指している。こうした映画の多くは、原作をまとまりのある劇作品に脚色するのではなく、有名な場面をつなぐというやり方で作られた。

ハンジョンコフの回想からは、映画制作の技術的な拙さを補う目的で有名作品を原作に

⁷⁴ Ханжонков А. А. С. 23-24. を参照。

⁷⁵ Ханжонков А. А. С. 37. より引用。

⁷⁶ サドゥール『世界映画全史4』65頁を参照。

選んでいた、制作側の意図を確認できる。しかし文学作品が題材になったのは、技術不足を補うためだけではない。

1908年以降、パテ社はロシアで自社の映画を公開する際に、どうしてもドラニコフほどヒットをとばせないことに悩んでいた。パテ社からはドラニコフやハンジョンコフに、ロシア人の興味を察知する嗅覚が備わっているように見えたのである。パテはその後ロシアフィルム社を設立し、ドラニコフやハンジョンコフが手がけた有名な文学作品や民間伝承、歴史上の事件を積極的に映画の題材として採用するようになる。

ドラニコフやハンジョンコフには、当初から、みんなによく知られているものである文学作品や歴史上の事件の何がロシアの観客に受ける題材なのかを判断する文化的・経験的な知識が備わっていた。しかも、前述したように当時の劇映画の作法の限界により、映画だけでストーリーを観客に理解させる技術はなかった。有名な文学作品を始め、すでに観客みんなが知っている題材を原作に選ぶことは、映画を興業として成立させるための必要要件だったのである。

撮影失敗の要因

ハンジョンコフ社が行った映画制作の試みの内、最も初期の1907年から1908年の作品には失敗続きだった。その要因の一つは照明である。フィルムに映像を映すだけの光量が撮影現場で確保できるかどうか、映画の正否を分けたと言っても過言ではない。成功したドラニコフ社の「ステンカ・ラージン」の撮影はすべて屋外で行われた。⁷⁷ ハンジョンコフ社においても、劇場の舞台で撮影する際、強力な電気照明を4つ用いた「ツァーリの花嫁選び」は商品化できる水準に仕上がったが、鉄道会館を借りて行われた「死せる魂」の撮影は、電気照明をあまり使用しなかったためにフィルムが焼けず、失敗に終わった。

フランスの大手の映画制作会社であるゴーモンやパテが大量の映画作品を制作できたのは、巨大スタジオをもっていたからである。採光を目的とした鉄骨ガラス張りの構造に加え、ゴーモンのスタジオにはさらに水銀灯、移動照明台車、アーク灯、1500アンペアの発電装置が備えてあった。⁷⁸ ハンジョンコフ社がモスクワに自社スタジオを建設するのは1912年のことである。映画制作を始めてからスタジオを建設するまでの約5年間、ハンジョンコフ社は撮影場所を求めて転々とする。

制作に初めて成功してからも、ハンジョンコフ社の映画制作の道のりは決して平坦ではなかった。しかし試行錯誤と経験を通じて、ハンジョンコフ社は映画制作の技術や知識を蓄積し、映画制作会社として着実に成長していった。

⁷⁷ Русское кино. 1908-1918. С. 38. 参照。

⁷⁸ サドゥール『世界映画全史4』60頁を参照。

C. 郊外での撮影

ハンジョンコフ社は映画制作を安定的に成功させるようになって間もなく、郊外で大規模な撮影を敢行した。この撮影はハンジョンコフの主導の元に行われ、ハンジョンコフ社の制作技術に一層の発展をもたらすこととなった。以下では 1909 年以降に行われた郊外ロケにスポットを当て、制作現場での試みを見ていくことにする。

撮影場所を求めて

ハンジョンコフ社は、映画「商人カラシニコフの歌」を巡ってドラニコフ社ともめたことがあった。ハンジョンコフ社が「商人カラシニコフの歌」を制作していることを知ったドラニコフが、同じテーマで映画の制作を行ったのである。これに怒ったハンジョンコフはドラニコフと袂を分かった。後に二人は和解するが、このことはハンジョンコフの後の映画制作にとって大きな教訓となった。

ハンジョンコフ社はこれ以後、映画制作に関して秘密主義に転じた。何の映画を予定しているのか、今何を撮影しているのかについて一切外部に漏らすことは許さなかった。俳優にすらあらすじを教えず、監督や関係者の間であっても映画のタイトルを口にしないで、かわりに暗号化して伝えあったという。

撮影地選びにもこの秘密主義は持ち込まれた。1909 年ごろのロシア映画界では、夏が映画の制作シーズンであった。ハンジョンコフは夏の間、モスクワではなく、地方に撮影班を引き連れて、大規模なロケを行うようになった。

ソコーリニキでの撮影

ハンジョンコフは映画の撮影地として、森と池とロシア風の建物がある場所を郊外に探した。そこで見つかったのがソコーリニキの別荘地であった。ハンジョンコフはその場所の一部を借りて撮影に臨んだ。このシーズンに撮影したのは全部で 4 作である。そのうち「エルマークーシベリアの征服者」という作品では初めての群衆シーンの撮影が行われた。コサック軍とタタール軍の戦いの場面である。この場面は映画「エルマーク」の成否を分ける重要なシーンだった。⁷⁹

両軍のエキストラの募集で集まったのはモスクワの学生たちだった。彼らは映画に出ることへの好奇心とやる気にあふれていた。エキストラたちは、組合のような組織を作り、その代表者がハンジョンコフ社と報酬や仕事に関わる話し合いを行った。

端役の彼らにもカメラのレンズを絶対に見てはならないなどの指示が与えられた。撮影

⁷⁹ Ханжонков А. А. С. 34. を参照。

したフィルムを見てみると、死人役がその時代になかったはずのオーバーシューズを履いたり、眼鏡をかけたコサック兵がアップで映るなどの難点があった。しかし群衆シーンは全体として成功した。⁸⁰ これまでハンジョンコフ社は、一日で三つの映画を撮影していたが、この時期から映画制作に時間をかけるようになり、「エルマーク」一本に三日間をかけた。⁸¹

歴史ロマンの流行

この時期、ハンジョンコフや、パテ社の映画のような歴史ロマンはロシアで人気が高かった。この人気をみたロシアにある映画スタジオが一斉に歴史ロマンを撮ろうとしたため、市場には同じような歴史映画があふれかえった。問題になったのは、時代劇用の衣裳や小道具が恒常的に不足したことだ。制作者たちは衣裳を探し回り、捨てられたものを再利用することもあった。つぶれた劇場に行き、衣裳、背景、小道具、果ては俳優までも持ち去ることさえあったという⁸²

撮影現場の仕事

ハンジョンコフが同じ頃制作した映画のうち、セットを用いての撮影もあったが、ハンジョンコフによればそれは「プリミティブ」⁸³ なものであった。「ルサルカ」の撮影では、現地にある建物をセットとして利用した。製粉所のセット代わりに、現地にあったダーチャの浴室を使い、大貴族の邸宅の入り口として、やはり現地にあるロシア的なスタイルの建物を利用した。⁸⁴

ハンジョンコフ社が、モスクワのトヴェルスカヤにある自社のアトリエで作った舞台装置も用いられた。ハンジョンコフ社の舞台芸術家、V. V. フェステルが制作したものである。角材で作った枠にキャンバスを張り、その上に監督が要求するあらゆるものを絵で描き込むのである。例えばオルシャの娘の寝室の舞台装置には、丸太の壁、窓、かすがいのついたドア、そのほかに昔風の彫刻を施した調度品、イコノスタス、その前にともされる明かりを描き込んだ。カメラを設置する位置にあわせて、立体感を出すための陰影も書き込まれた。出入りのためのドアも角材と絵を描いたキャンバスでできていた。こうして作られたセットがいかにも作り物らしく揺れているのがスクリーンにしっかり映っていた。

ハンジョンコフは、「ルサルカ」の最後の場面である水中の王国の舞台装置さえも、海

⁸⁰ Ханжонков А. А. С. 35. を参照。

⁸¹ Ханжонков А. А. С. 34-35. を参照。

⁸² Leyda, p. 39. を参照。

⁸³ Ханжонков А. А. С. 35. を参照。

⁸⁴ Ханжонков А. А. С. 35. を参照

の植物や貝殻などを書き込んだ絵ですますほかなかったことが不満だった。

「オルシャ」の撮影以降、監督補佐という役割が新設された。出番待ちの俳優たちの扮装を記録するほか、何十もの仕事をこなす重要な役目となっていき、監督補佐なしには撮影が立ちゆかないほどになった。

ハンジョンコフ社は、「オルシャ」の撮影を行っていた1909年頃から、フィルムの長さが100メートル台の短い映画はほとんど制作していない。ハンジョンコフ社の映画の目録によれば、「オルシャ」は280メートル、「ルサルカ」は280メートル、翌年の「ヴァジム」は400メートル、「仮面舞踏会」は370メートル、「白痴」は430メートルと、⁸⁵ 映画は長くなる傾向にあった。さらに、撮影を数日かけて異なる場所で行ったり、屋外とセットでの撮影の場面を組み合わせるなど映画制作の仕事が複雑化したことで、こうした役職が必要となってきたのである。

クリラツコエ・セローでの撮影

この年の夏の撮影は主にハンジョンコフ社のアトリエと、ソコーリニキの別荘地で行われたが、いくつか難点があった。モスクワのアトリエは二つの大きな建物に挟まれ、ガラス張りだった。そのために、スタッフや俳優たちは夏の暑さに苦しみ、それは作品の質にも反映したのである。またソコーリニキの別荘地に機材や衣裳を運ぶには無駄な支出がかかった。

ハンジョンコフは、モスクワの外にあり、交通の便がよく、かつ風光明媚な場所を新たに撮影場所として選ぶことになった。その条件をかなえていたのはモスクワ西部にあるクリラツコエ・セローだった。ハンジョンコフは現地の農民屋敷を借り、撮影所を作った。⁸⁶ クリラツコエ・セローはモスクワと鉄道で結ばれ、古くから別荘地として有名な場所だった。寺院もあり、撮影のための背景が豊富だった。

この撮影所に、1アルシンほどの高さの舞台を作った。そして舞台装置や、太陽の光を遮るためのカーテンも固定した。そばにある小屋を俳優の控え室とし、俳優たちはそこで着替え、メイクアップ、休憩をした。さらにその小屋には舞台装置や小道具などを保管する納屋を増築した。

クリラツコエ・セローではネクラーフ原作「行商人」、劇場の上演に基づく「第二の青春」、レールモントフ原作を脚色した「ヴァジム」「仮面舞踏会」、プーシキン原作の「スペードの女王」、ドストエフスキイ原作「白痴」である。⁸⁷

⁸⁵ Ханжонков А. А. С. 147-149. を参照。

⁸⁶ Ханжонков А. А. С. 36-37. を参照。

⁸⁷ Ханжонков А. А. С. 37. を参照。

ロケの見物人たち

撮影はすべてクリラツコエ・セローで行われ、モスクワの灼熱のアトリエでの撮影は行わなかった。クリラツコエ・セローは森や川、様々なスタイルの建物、粗末なあばらやから地主屋敷までそろっており、撮影には理想的な環境だった。しかし、ただ一つの難点は、見物人であったとハンジョンコフは回想している。

外で撮影をしていると、お茶の時間を中断してきた農民や、別荘滞在者、こどもたちなど、瞬く間に人が集まってくる。近くに道があれば、辻馬車屋が立ち止まり、撮影を見物した。見物人たちは撮影のじゃまにならないよう、基本的に、カメラの後ろに集められた。人々は、俳優たちの演技を見て自分の感想を話し合ったり、盛り上がる場面では声をあげて感動したので、話し声はかなりうるさかったようである。⁸⁸

クリラツコエ・セローでの撮影経験は、ハンジョンコフ社の映画制作にとって実り多いものとなった。ここでの経験は工房での一連の作業の連携や作業場の構造設計に生かされた。⁸⁹

ハンジョンコフ社の映画制作

このように、1907年から映画の撮影を始めたハンジョンコフ社は、全くの未経験の状態から、郊外に撮影場所をつくり、ロケを重ねてバリエーション豊かな映画を制作できるまでになった。ハンジョンコフ社が巨大な映画撮影用のスタジオを建設する1912年までの間に、ハンジョンコフ社は着実に技術や経験を積み重ねていった。

さらにハンジョンコフはその間も配給会社としての業務を継続し、ロシアにイタリア、フランスの優れた映画作品を供給した。この時代におけるハンジョンコフの功績は、映画制作に関しては手探り状態であったロシアにおいて、失敗を乗り越えて映画制作と配給という二つの分野において映画産業の基礎を確立したことにある。

結び

ロシアに映画の産業化の波が押し寄せてからわずか数年の間に、ハンジョンコフ社は小さな配給会社からロシアの映画産業の牽引役に成長した。ハンジョンコフ社を育てたのはドラコフ社、そしてパテ社をはじめとする外国の映画会社との熾烈な競争であった。初期におけるロシアの映画産業は、ハンジョンコフ社とドラコフ社の活動、そして外国の映画会社の進出なしに考えることはできない。

⁸⁸ Ханжонков А. А. С. 37-38. を参照。

⁸⁹ Ханжонков А. А. С. 37. を参照。

大野 斉子

本論では、映画の産業化とロシアに進出したパテ社の活動、ロシアにおける映画館の増加、映画制作の試みと成功の軌跡を取り上げた。ロシアの映画産業の基礎が確立する経緯を、世界的な映画の産業化と、ロシア人による映画会社の活動を軸に考察した。

本論文は平成 18 年度日本学術振興会研究費補助金による研究成果の一部である。

Early cinematographic industry in Russia and the activities of Alexandr Khanzhonkov

ONO Tokiko

This paper examines the activities of one of the earliest Russian cinematographic producers Alexandr Khanzhonkov and the beginning of the Russian cinema industry. By analyzing it, we are in a position to examine the cultural influence of foreign cinema on Russia, the growth of Russian audiences and the earliest film making by Russian producers.

First, we analyze the activities of the French cinematographic company Pathé Frères and other foreign companies in Russia. In particular Pathé was the first company to industrialize film making and to establish its agencies all over the world at the beginning of the 20th century. Pathé's agency opened in Moscow in 1904. We will examine Pathé's influence on Russian culture.

Second, we will examine the cultural reception of cinema and companies' activities from 1904 to 1908 in Russia. Cinematographic audiences rapidly increased and Russian native companies tried to produce films. We will examine Khanzhonkov's memoirs in which there were many episodes on unsuccessful films produced by Khanzhonkov. They provide important evidence for examining the early days in Russian cinematographic history.

Third, we will examine the development of the cinematographic industry from 1908 to 1910 in Russia. Russian native companies succeeded in producing films in 1908. Both Russian and

foreign companies produced many films in Russia, and their competition prompted the progress of Russian films' quality. We will examine their activities, the cultural reception of Russian cinema with Khanzhonkov's memoirs and statistical materials.

In conclusion we will examine Khanzhonkov's attempts to produce films from 1908 to 1910. We will find not only the progress of his skill to make films, but also the development of the Russian cinematographic industry through his experiences.

The world industrialization of cinema and Russian producers' activities constructed the foundation of Russian cinema, through which the Russian cinematographic industry developed in the 20th century.